左遷

新しい任務

НОВОЕ НАЗНАЧЕНИЕ

A. ベック

前田 勇 訳

訳者　前田　勇（まえだ　いさむ）
1931年北海道生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了。㈱トーメンのモスクワ駐在員事務所長を経て，現在，経団連・日ソ経済委員会主任研究員。訳書にイ・グレーコワ『大学教師』（群像社）。

現代のロシア文学　第二期第六巻
左遷　新しい任務
一九九一年二月十五日　初版発行　©
著者　A・ベック
訳者　前田　勇
発行者　浅川彰三
発行所　株式会社　群像社
〒101　東京都千代田区猿楽町二―三―一
振替　東京四―九五九四三
電話　（〇三）三二九一―六一五三
印刷・製本　岩城印刷株式会社
電話　（〇三）三五七九―〇〇〇六
万一、落丁乱丁の場合はおとりかえ致します
ISBN 4-905821-86-X C0097

左遷

新しい任務

НОВОЕ НАЗНАЧЕНИЕ

A・ベック

前田勇訳

群像社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Bek, Aleksandr Al'fredovich
(Бек, Александр Альфредович)
Novoe Naznachenie (Новое Назначение)

© Izdatel'stvo «Knizhnaia palata», Moscow, in 1987.
Japanese edition © Gunzosha Ltd., Publishers, Tokyo, in 1991.
This Japanese edition is published by arrangement with
VAAP (Copyright Agency of the USSR), Moscow.

目

次

1 残務整理 11
2 孤独な昼食 21
3 持病 27
4 新しい仕事 38
5 深更の回想 42
6 スターリンの尋問 45
7 オニーシモフの涙 53
8 セルゴ・オルジョニキーゼの最期 56
9 現場の匂い 60
10 「スターリンの一兵卒」 64
11 息子の眼 78
12 地下鉄の「事件」 83
13 オニーシモフ家・最後の朝食 89
14 「わが残酷の時代よ……」 95
15 見送りの人びと 102
16 離陸 109
17 一人暮らし 117
18 技師長チェルィシェフ 123
19 突然の電話 129
20 スターリンの叱責 134
21 技術屋 138
22 レスヌィフの発明 142
23 スターリン命令 148
24 会議 156
25 作家ブィジョフの関心 160
26 命令中止 169
27 嵐の前 176
28 代表団 182
29 チェルィシェフとの再会 186
30 暗い過去 195
31 戦時下の記憶 202
32 夏の別荘 205

33 とり残されたオニーシモフ 211
34 発病 217
35 帰国 225
36 入院 235
37 クレーム 241
38 オニーシモフの視察 250
39 鉄の規律 258
40 工場長ゴロヴニャーの実験 263
41 革命記念日 270
42 病室 280
43 オニーシモフの病歴 288
44 「放射菌症」 293
45 ひとりの猟師 299
46 戦時のスターリン命令 303
47 工場疎開 308
48 ゴロヴニャーの成功 314
49 チェルィシェフの憂鬱 319
50 手術不能 323
51 ゴロヴニャーの獲物 329
この小説の歴史について 333
訳者あとがき 345

ブックデザイン／宮下佳子

左遷

新しい任務

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　残務整理

アレクサンドル・レオンチェヴィチ・オニーシモフの生涯を調べ、多少とも彼のことを知っている人々と話しをするうちに、わたしは彼の転勤についての最初の漠然とした情報はすでに一九五六年の夏にあったと突き止めた。

この噂ははじめのうちは確認できなかった。日がたち、月がかわったが、アレクサンドル・レオンチェヴィチは依然として国家委員会の議長のポストにあった。しかし、それが九月になるとオニーシモフの書記たちや審議官たちは、アレクサンドル・レオンチェヴィチには今後外交面での任務が与えられ、本人は間もなく北欧のある国に発つという（当時の独特な表現を使うと）決定が成立したことを知った。この話はもう多くの人から耳にするようになった。

多くの人から。しかしオニーシモフ本人からではない。彼は相変わらずアホートヌィ・リャード通り（現マルクス大通り）の閣僚会議の建物の二階にある自分の執務室にかっきり朝の八時に入っていた。アレクサンドル・レオンチェヴィチが到着するまでに、机の上にはいつものように製鉄工業や非鉄金属工業の工場の稼働状況、石油や石炭の採掘状況の一昼夜毎の総計表が置いてある。腰掛け部分が人造皮革張りの固そうな樫材の椅子に腰を下ろすと（オニーシモフの趣味、高価な家具に対する嫌悪は職員にはとっくに周知のことだった）、彼は眼鏡をかける。もうずいぶん前から読み物をする時には手離せなくなっているのだ。眼鏡の玉と大きな枠が長年の睡眠不足の跡である目の下の黒い半円形の隈を隠している。まるで旋盤にかけたみたいに、ただ上唇だけが少し引っ込んでいるだけで非のうちどころがないほどに輪郭の整った、短めの顔が数字の欄に傾く。小さくて白い、わずかに黄ばんだ手は銃剣を持つように鉛筆を握り、時々なにかの数字にすばやく下線を引く。やせた指はかすかに震えている。いや、これは老人性の痙攣ではない。オニーシモフはまだ五十四歳になったばかりで、まばらな白髪は、まるで定規を当てたかのように、いつもきっちりと真ん中で分けた栗色の髪の左側に隠れている。しつこい指の震えはもう数年来彼を苦しめている。平静な時には痙攣は目立たないが、腹を立てた時はひどくなる。

医学ではこの奇妙な病気を治すことができなかった。それにアレクサンドル・レオンチェヴィチは医学も医者の処方も馬鹿にしていた。指が震えるなんて糞くらえだ。気にしないことだ。痙攣するといっても、彼がまだほんの子供だった実科小学校五年生の時に清書のアルバイトができたという達筆にはいささかの影響がなかったから尚更である。こうして書き込みをしている字もはっきり

しているし、鉛筆で引く線もしっかりしている。オニーシモフの鉛筆もまた部下にとっては忘れられないもので、いつも槍のように固く、尖っていた。

左手はたえず机の上の、上蓋に犬の絵のついた煙草『ドルーク』の箱に伸びる。タイプされた文字から目を離さずにマッチをすり、いつもどおりむさぼるように煙を吸い込む。一九三八年、もう若くはなくなってからのこと、おのれの運命が決定した日に始めて彼は煙草を吸った。吸い始めて、それ以来やめられなくなった。

吸殻の火がまだ消えずに灰皿のなかでくすぶっているのに、オニーシモフはもう次の煙草に火をつけている。自分のスタイル、何十年と磨きをかけた管理スタイルに忠実なアレクサンドル・レオンチェヴィチは、書類をチェックするだけではおさまらない。総計表を調べながら、時々電話机に向かってダイヤル電話（政府専用電話がこう呼ばれていた）をかける。電話は大臣、局長につながれ、彼はどこそこの工場でどうして生産量が落ちたのか、なぜある注文番号のものが期限通りに生産されなかったのか、どういうわけで新しい鋼種の『分析数値との不つり合い』が続くのか、回答を求める。大臣室の説明には満足せず、何も真に受けないという原則に忠実に、彼は慌ただしく呼び鈴のボタンを押すと、瞬時に現れた書記に自分の電話を工場につなぎ、電話口に工場長か現場主任を、時には職長を呼びつけるように命令する。工場の人間にダイヤル電話で聞いた説明の再確認をするのである。仕事を細部の細部にわたって知ること、誰よりもよく仕事のことを知ること、言葉や書面を信じないこと――これが彼のモットーだった。機関を緊張状態に置くこと――彼は自分の手法をこう定義した。

一日の総計表は片づいた。電報も見た。一枚一枚に『ソ連邦閣僚会議金属工業・燃料国家委員会議長』の黒文字の入った大型の用箋にはいくつかの書き込みがしてあり、アレクサンドル・レオンチェヴィチはこれらの問題に今日一日これから取り組むことになる。彼は机の中から金属工業への自動機器導入に関する資料を取り出す。彼はすぐさまそれに没頭する――これで何度目になるだろう――設備納入予定表、据付、運転開始、ならし運転の予定表を調べ、また電話して、微に入り細に入り突っ込んで、ゴスプラン〔国家計画委員会〕、機械製造関係省に圧力をかけ、自分の補佐官を呼びつけ、指示をあたえる。

技術百科事典、製鉄、非鉄工業、鉱物燃料、化学、地学の書籍がつまった書棚と並んで、壁ぎわの円テーブルには新聞の束がきちんとそろえて置いてある。オニーシモフは『プラウダ』は自宅で丹念に読んでおり、つまりそれは最初の煙草一本をくゆらしながら読むのだが、『イズヴェスチヤ』と『コムソモールスカヤ・プラウダ』は仕事に出掛ける車の中で目を通している。役所の執務室で彼を待っているのはそれ以外のモスクワの新聞である。円テーブルには工業地域の日刊紙も山積みされている。ドンバス、ドニエプロペトロフスク、ウラル、外コーカサス、シベリア・極東の工業中心地の新聞である。これらの地方新聞はすでに書記局で処理済みで、オニーシモフが興味を持ちそうな記事にはすべて赤鉛筆で印がつけてある。その横には、科学アカデミーの報告雑誌と情報研究所から送られてきた外国の雑誌の論文の翻訳がある（オニーシモフのできるのは英語だけだ）。さらに金属出版所や石炭出版所の書籍も置かれる。いかなる本も雑誌も、一冊たりともオニーシモフの手によらずに円テーブルから片づけられることはない。

彼は椅子から離れると、申し分のないほど磨きあげた床板（彼は絨毯を贅沢品と考えて嫌っている）を踏んで、このテーブルに向かう。整った顔立ちをしているアレクサンドル・レオンチェヴィチの頭は非常に大きい。彼は平均より背は高いが、それでも頭は大きいのだ。しかし首の方は余り長くない。そのために、まるでたえず危険を感じて首を肩の中へすくませているように見える。座っている時はせむしと思われかねない。とんでもない、彼は背を丸めて歩いてなどいない。彼の足取りは多少重たげだが、エネルギッシュだ。テーブルの手前でオニーシモフはふと立ち止まる。大きな頭ががっくり傾く。もうすでに一、二度偶然ドアを開けた書記の一人が、執務室の真ん中でこんなポーズで凍りついたような、なにか心ここにあらずというような姿のアレクサンドル・レオンチェヴィチを見ている。職務上オニーシモフは工業部門の展望や将来のことに専心すべきであったが、思いは過ぎし日に向かうのだった。なぜか記憶によみがえってくる、時にはつじつまの合わない過去の情景にしばしば彼はとらわれるのだった。

お決まりの黒っぽい縞のスーツに身を包み、いつもの襟を糊で固めた清潔なワイシャツに黒っぽい地味なネクタイの彼がこんな風にして突っ立っているのだ。ある時、ディケンズを読みあさっていた息子のアンドリューシャが言った、「パパったら英国の事務員みたいだね」。

淋しそうな緑がかった眼が円テーブルに注がれる。こんなもの今のオニーシモフにとって何になるのだ。その本たるや『油井ボーリング』、『磁気選鉱』、『パイプ溶接機』ではないか。そしてあれは雑誌『石炭』の最新号だ。今日明日というわけではないが、彼は石炭や鋼鉄と別れを告げ、このポストとこの執務室を去ることになるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com